

牛久：学校周辺に見る自然

第34号 牛久二小

2012年10月7日発行

＜夏の終わりの植物たち ②まだ咲いている花＞

牛久二小4年2組との「夏の終わりの生き物」観察。今回も9/14に観察した植物たち。夏から咲き始めまだ咲いていた花や、その他の植物たちを紹介しましょう。



まず、サルスベリ。中国南部^{げんざん}原産のミソハギ科の落葉樹^{らくようじゆ}で、漢字で「百日紅」と書きますが、文字通り、3か月以上にわたって次々と咲き続けます。ときどき、白花のサルスベリが植えられているのを見ることがあります。「猿滑り^{ざるすべり}」の名の由来は、サルでもすべり落ちてしまうくらい幹や枝が滑らかなところからきているようですが、ツルツルなのは樹皮^{じゆひ}がはげ落ちやすいためです。他の樹木では樹皮がとどまって、幹や枝が太くなるにしたがって引き裂^{さかれ}かれたりしてそれぞれ独特^{どくとく}のもようを描^{えがいて}いてきますが、サルスベリでは早くに落ちてしまうので、その下の木肌^{きはだ}が現れてしまうようです。虫や寒さには弱そうな気がしますが、どうでしょう？

文字通り100日にわたって咲き続ける「百日紅(サルスベリ)」(左)と、その幹(右上)、樹皮のはげ落ち(右下)。



グラウンドの南側斜面^{しやめん}には、クズの花^{あまいかおり}が甘い香りを漂わせていました。香りに誘われてか、ハナバチの仲間がもぐり込んでいるのを時々見かけます。繁殖力^{はんしよくりよく}がすごく、いまではやっかい者扱いですが、根からクズ粉をとったり利用された時代もありました。夏の盛り^{さかり}には一日に1mも伸びることがあるそうですが、本当でしょうか？いつか調べてみたいですね。

甘い香りを漂わせてハチなどを誘うクズの花。



ビオトープでは、**ヤブラン**の花がひっそりと咲いていました。葉も食べられてボロボロでした（よく見ると、写真にも毛虫が写っています）。「ラン」といってもラン科の仲間ではなく、ユリ科の仲間です。果実は熟すと黒くなり、鳥などが食べて種子を運ぶようです。前のクズは「秋の七草」の一つですが、秋に花を咲かせる植物もけっこうありますね。
ビオトープの林のふちでひっそりと花をつけるヤブラン。



校舎のネットに咲く、ヘチマの雌花（左）と雄花（右）。雌花の下部には、小さな果実のようなものがついている。

校舎のネットでは、まだ花をつけている**ヘチマ**がありました。左が雌花（めばな）で、すでに小さな果実のようなものがついています。右は雄花（おばな）でそのようなものはありません。雄花や雌花、果実のできるしくみについては、5年生で学習します。お楽しみに！



秋になっても、みずみずしく元気な植物もいます。コケやシダの仲間です。雨が降って湿気が増すと、鮮やかな緑色でとても生き生きと見えます。写真の**ノキシノブ**もそう。葉に白く丸いもようがありますが、この裏側には、仲間を増やすもとなる「孢子（ほうし）」がたくさん詰まった袋があります。コケやシダについて学習するのは、中学生になってからですね。こちらもお楽しみに！

雨のあと、生き生きとして見えるノキシノブやコケ類。



最後にビオトープの土山から伸びていた竹の「地下茎（ちかけい）」。横に伸びているのが地下茎で、その節からもじゃもじゃと出ているのが根です。たぶん、ビオトープの林の**モウソウチク**から伸びてきたものだと思いますが、すごいですね。一つの竹林内の竹が、すべて地下茎でつながっていたということもあるようです。

【理科支援員 宮内】

ビオトープの林から伸びてきたらしい竹の地下茎。